

事業実績報告

新潟県脳卒中・心臓病等総合支援センター

① 総合支援における実施体制

新潟県脳卒中・心臓病等総合支援センターは、県や医師会などと連携を取りながら地域全体の患者支援を拡充させ、情報提供や普及啓発、急性期から回復期・維持期までの円滑な移行推進、医療・支援機関のネットワーク構築などを図るための実行部隊である。例えば脳卒中や心血管疾患のロジックモデルにおける指標の分析や立案は新潟県や新潟県循環器対策推進協議会等の組織が行うものであるが、そのような組織と協同し新潟県循環器病対策推進計画のあり方について意見交換を行い、新潟県行政の指向と歩調を合わせた整備を進めている。

新潟県は広い面積に中核都市が散らばる地政学的特徴を有する。このため活動を円滑に行うため各医療圏に支部を開設している。各支部も相談支援窓口を有し、地域住民の相談・支援を行う。また循環器病の診断や治療の患者フローのネットワーク整備にも機能している。

② 実績報告

ア. 循環器病患者・家族の相談支援窓口の設置

診療連携拠点病院としての本院では、がん患者支援センターおよび肝疾患相談センターが患者サポートセンターとの協調で進められている。当センターの相談支援窓口も「脳卒中・心臓病患者相談窓口」として上記2相談窓口と並列する形態で設置した。3つの相談窓口を横並びに設営することで、患者サポートセンターを中核点として有機的な運用を進めている。相談窓口ではトリアージ機能を一部共有化させ、脳卒中・心臓病等総合支援センターに所属する事務員やMSW、看護師を患者サポートセンターと協働する形態としている。これにより迅速で有効な相談支援フローを構築できていると感じている。相談窓口の主軸は①～④としている。

- ① ICTを活用した脳卒中地域連携
- ② 超高齢社会への対応を踏まえた循環器病患者の医療連携
- ③ 仕事と治療の両立支援やACPなど意思決定支援
- ④ 小児期から配慮が必要な循環器病への対応と移行期支援

また新潟県脳卒中・心臓病等総合支援センターには各医療圏にセンター支部を設置しているため、新潟県民全体が相談支援窓口を利用できるよう働きかけている。

イ. 地域住民を対象とした循環器病について、予防に関する内容も含めた情報提供、普及啓発

新潟県脳卒中・心臓病等総合支援センターは本部と4支部で構成されている。

本部では2回の市民公開講座を開催した。1回目は世界心臓デーの日に脳心センター開設記念として、循環器病の実態と対策について情報提供を行った。2回目は循環器病の最たるリスクである高血圧にスポットを当て、STOP高血圧プロジェクトを立ち上げ啓発活動を行っている。

新潟県は全国で5番目の面積を有し、長細い地形である。本部主催の市民公開講座のみでは県民全体に循環器病に対する情報提供を行うことは難しい。このため各支部主催の市民公開講座も3回開催し、脳卒中、血栓症や心房細動などをトピックスとして掲げ啓発している。

また新潟県住民の循環器病への理解や興味は低く、他人事として捉えてしまう傾向が強い。まず興味を抱いてもらうことを目指し、世界心臓デーや世界脳卒中デーには県庁や競技場のライトアップを行っている。

ウ. 地域の医療機関、かかりつけ医を対象とした研修会、勉強会等の開催

新潟大学医歯学総合病院と県医師会や地方医師会の協働は強固であり、そのネットワークを通じて医療機関やかかりつけ医への情報発信を行っている。例えば心不全の病態は広範多岐に渡るため、心不全診療と全人的支援、専門医と非専門プライマリケア医、との両軸を念頭に診療の持ち場ごとに心不全診療の研修を分別して行っている。非専門プライマリケア医向けにはBNPのバイオマーカーとしての意義を通じて、BNP測定の普及とそれに基づく心臓病連携医療につなげる取り組みを行っている。

他、様々な職種からのチーム医療のあり方や問いかけを通じて、循環器病診療が熟成されると考えており、クラウドファンディングによる心リハ指導士育成のため勉強会や、サポート基金事業による心不全療養指導士育成のための研修会を開催している。

エ. 相談支援を効率的に行う、資材（パンフレットなど）の開発・提供

効率的な情報提供の場として、ホームページを作成している。新潟県民を対象に既存の有料資材も活用し、循環器病について脳関連と心臓病関連に分類し、病態や治療、生活上で留意すべき点を説明している。またオリジナル動画としては頸静脈怒張の診方を作成し、患者のみでなく医療者も共有できる資材と考える。ホームページにはお知らせや講演会の情報を随時アップしているが、その際にLineを活用することでホームページへのアクセスを容易にする取り組みを行っている。

他、循環器病対策における血圧測定の習慣化に取り組む「にいがたSTOP高血圧プロジェクト」を立ち上げているが、この取り組みを普及させるため医療機関や各自治体宛のポスターを作成している（本資料巻末）。また一般住民に対しては、にいがたSTOP高血圧プロジェクトステッカーを作成し、市民公開講座で配布し血圧測定を啓発している。

オ. その他、総合支援を効率的に行うために実施した内容

患者総合サポートセンターとして医師会とともに新潟医療圏地域連携会議を立ち上げ、DXの導入により転出入の患者フローを可視化させた。

また行政やマスコミを通じた積極的な啓発・広報活動を行っている。地元志向の強い新潟県では、寡占状況にある新聞とテレビの影響力が大きい。各医療圏で循環器病に従事する医療者から、コラムと題して循環器病の病態や治療、脳卒中や心臓リハビリテーションについて寄稿していただき、定期的な新聞掲載を行った。

循環器病対策として、循環器病の最たるリスクである高血圧を予防する取り組みとして「にいがたSTOP高血圧プロジェクト」を立ち上げている。このプロジェクトの実施機関は当センター、新潟大学生生活習慣病予防・健康医学講座、新潟県医師会、全国健康保険協会、および一般企業であるが、新潟県循環器病対策推進協議会、健康立県ヘルスプロモーションプロジェクトと連携・協働している。

カ. 補助によって得られる効果

本年の活動では、まず新潟県住民や医療関係者に当センターの存在や活動の意義について理解していただくこと、そして循環器病について予防や治療も含めて周知することを主体に行ってきた。循環器病の診断や治療の患者フローのネットワークについても着手し進めているが、機能するまでには整備されていない。循環器病領域で医師不足が顕著である新潟県で、地域住民が安心して生活し医療を受けることができるためには、「多職種による包括管理と予防介入のプログラム」と「機能分化とネットワークに基づく有効な患者フロー」の構築が必須である。

○ 令和7年度 新潟県脳卒中・心臓病等総合支援センターへの相談件数 実績報告

1 院外からの相談

(期間：令和7年7月3日～令和8年3月5日)

① 実人数

	総数 (人)
脳	22
心臓	20
その他	7
計	49

② 実件数

	総数 (件)
電話	45
対面	4
計	49

2 院内からの相談

(期間：令和7年7月3日～令和8年1月19日)

① 実人数

	総数 (人)	(うち入院患者)	(うち外来患者)
脳	64	61	3
心臓	92	76	16
その他	0	0	0
計	156	137	19

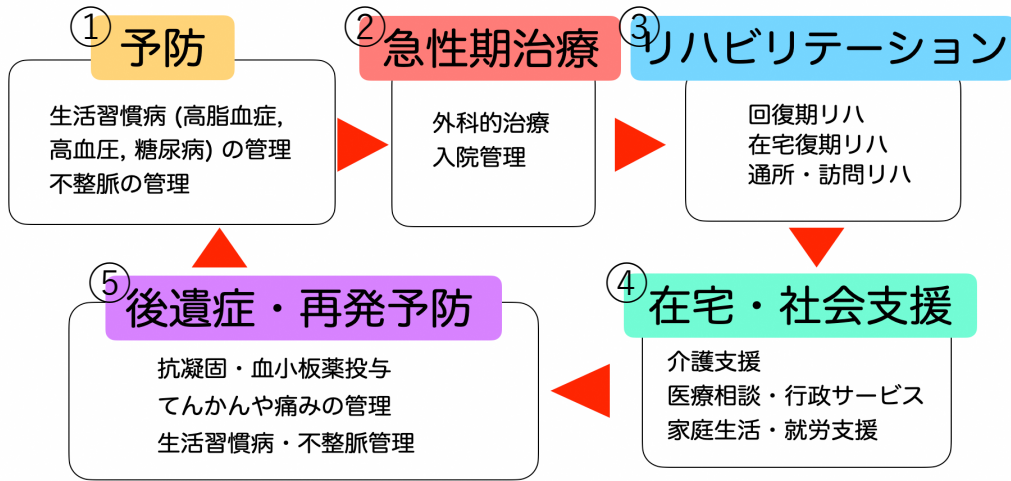
② 実件数

	総数 (件)	(うち入院患者)	(うち外来患者)
脳	/	204	/
心臓		204	
その他		0	
計	436	408	28

◎ 脳卒中診療のあり方と新潟県における理想的な連携

脳卒中診療とは以下のごとく、

①予防、②急性期治療、③リハビリテーション、④在宅・社会支援、⑤後遺症管理から再発予防へ、というサイクルを円滑に回して患者のより良い生活を維持させることである。



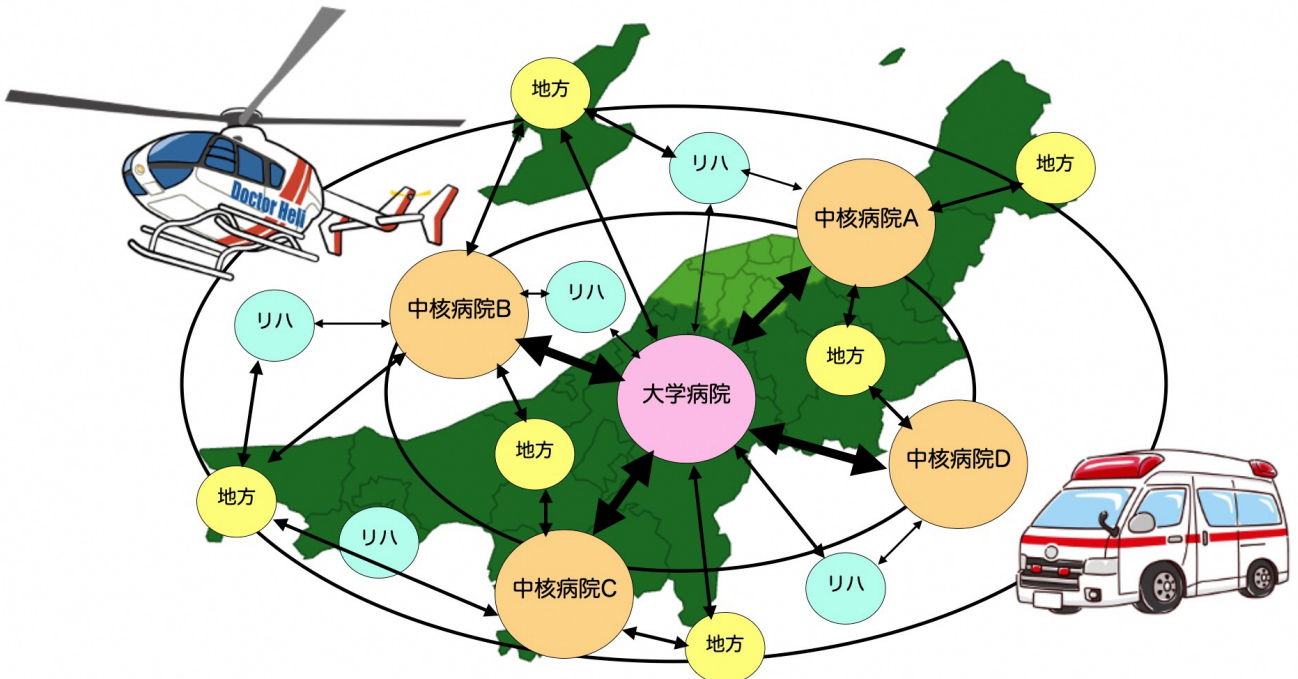
①⑤は一般内科医と市民の啓発活動が、②③④は病院間の連携構築が主軸となる。

新潟県の脳卒中診療を考えた場合、まずその医療体制の大きな特徴として、

- ・ 長く広大 (全国5位) で他県と隔絶した県域に多くの人口 (全国15位) がいることと、
- ・ 中心に位置するたった一つの国立大学医学部で全県の医療を担当していることがあり、

全国で唯一無二の医療事情となるが、だからこそ新潟県独自の診療体制の構築もできる。

以下は②③④の連携構築の理想的なモデルであり、患者の病態や病状に応じて病院間のやり取りが円滑に行われることで、県内全域のどこにおいても患者が同等の治療・リハビリ・支援を受けられる体制を、**にいがた脳心センター**を軸に整備するものである。



* 現在、脳神経外科的急性期処置が必要な患者に対しては新潟大学病院脳神経外科を中心とし、新潟市民病院、長岡赤十字病院、県立新発田病院、県立中央病院を中核病院と位置付け、その他の私立病院、地方病院、リハビリテーション病院と連携をはかり、このモデルに近い連携を推し進めている。



朝めし前の、血圧測定。

来年も、この先も、おいしいご飯を食べるために。

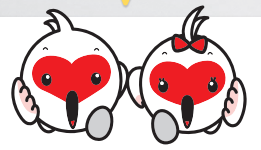


我慢せずGO!

朝血圧 **130**mmHg を超えたら病院へ!



詳しくはこちら



とっぴー

きっぴー